

成技術の開発や全球測位システム（GPS）衛星からのマイクロ波データを使って可降水量を求める手法の開発等に励んだ。特に後者に関する研究では彼はその中心的な役割を果たし、GPS 気象学という新しい研究分野を生み出し現在の気象学のトレンドの一つとなった。また下館ヘダウンバーストの現地調査に行ったりGPS ダウンルッキングでは富士山に登って観測したり、野外観測にも積極的に携わった。

こうした豊富な研究業績と業務経験を持って、2002年に気象庁予報部数値予報課長として着任した。ここでも、彼は数値予報技術開発全体に的確に指揮・指導した。最近では国際プロジェクト THORPEX（観測システム研究予測可能性実験）において、国際中核運営委員会の委員を務めるとともに、アジア地域委員会議長としてアジア各国の数値実験・観測計画のとりまとめ等を行っていた。

私が彼を知ったのは1971年に大学院にやってきた時である。その同級生に中村健治会員・名古屋大学地球水循環研究センターがいて、同じ中村では困るということで私たちは親しみを込めて「はじめ」と呼んだ。

「けんじ」氏は大学院時代の彼の思い出を、“遊びまわっている時でも静かに研究を続けており、我々がテニスなどで暗くなってから部屋に戻ってきても、当時部屋の助教授であられた松野先生（地球フロンティア研究システム）と討論している、というようなことが何度もあった。彼の静かな態度はその後も変わらず、ものを聞いたり頼んだりすると、少し恥ずかしそうに笑いながらも常に気持ちよく対応してくれた。”と語ってくれた。このように、研究はもちろん彼はテニスや登山やスキーなども得意であり、何事につけ我々のリーダーであった。若い時に私は彼に連れられて巻機山（新潟県）に登ったことがある。その時に彼が山道を疲れた顔することなく先導してくれたことを思い出す。また気象研時代にはいつもにこやかに私たちに接してくれた顔を思い出す。頑健で温厚な彼がたった10日間の闘病生活で逝ってしまうなんてまだ信じる事ができない。また奥様と二人のお嬢さん（高校1年）を残して逝ってしまったのも彼にとって極めて心残りのことであろう。心より彼のご冥福を祈りたい。

（吉崎正憲・気象研究所予報研究部第1研究室長）

追記

5期10年に亘って気象学会の常任理事であった中村さんは、会計担当という重い役割を果たされた。その当時は事務体制が2人で、年々増える事務に対応するのが困難であり、そのため、学会が社会の期待に応える事業に積極的に乗り出すには基盤がぜい弱であった。その打開策の一つとして先ず事務局員の増員を総合計画担当理事の私が練り、その予算的裏打ちという困難な仕事を中村さんが整え、目的は実現した。色々な面での学会運営において、中村さんは常に裏方として難事を受けて立ってこられた。学会の諸事がスムーズに運んでくれたのも、表には見えにくいところでの中村さんの献身が背景に流れていることを忘れてはならない。

「山を歩く人は皆いい人だ」と語ったことがある。中村さんは、山を歩きながら、人間が好きだったのだな、と今にして思う。

（木田秀次／学会常任理事）